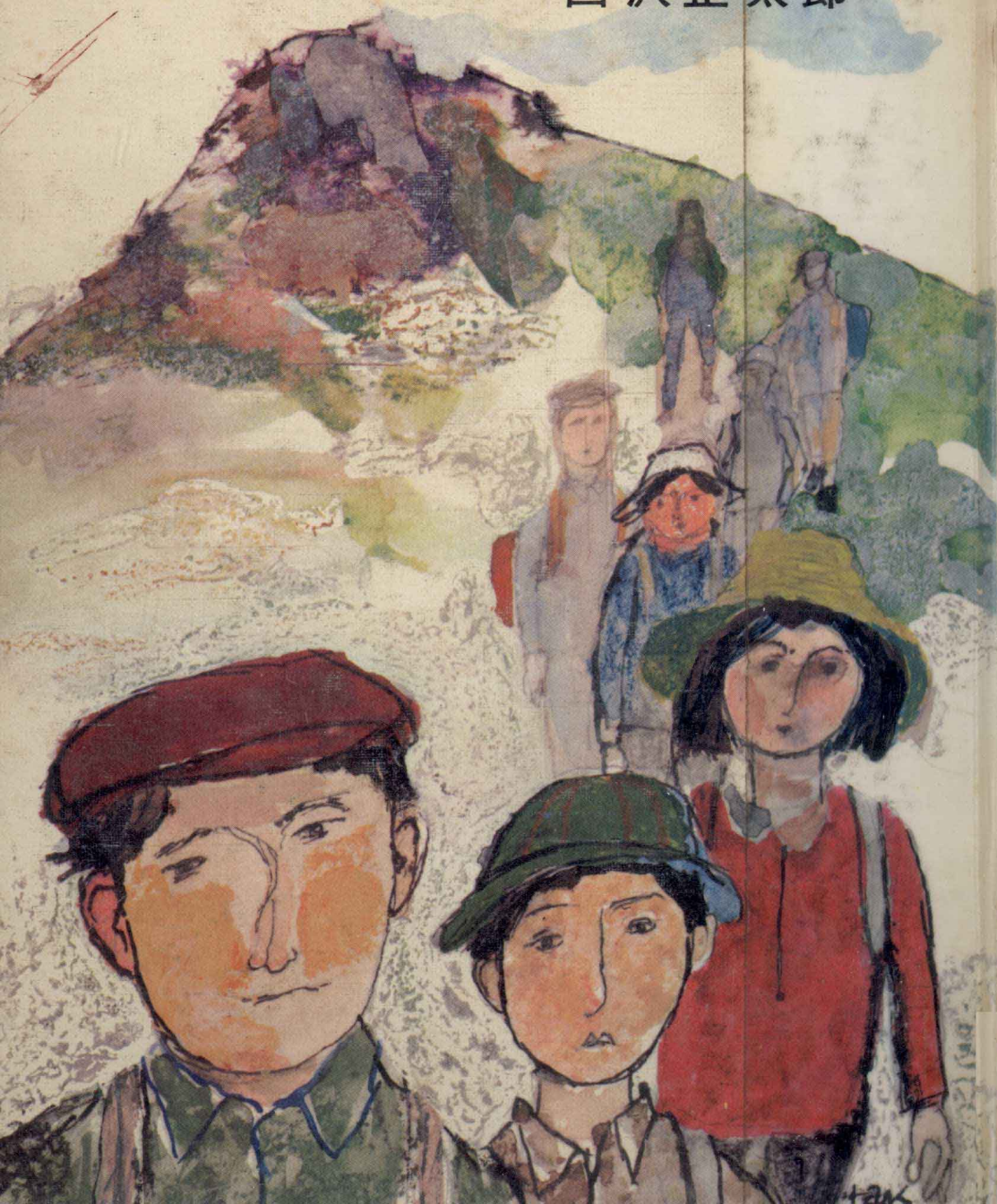


山鳴りのアルプ

西沢正太郎



鳴りのアルプ

西沢正太郎





NDC 913

8093-064003-7764

ポプラ社の創作文学 3

山鳴りのアルプ

定価 五五〇円

著者

にしざわしやうたろう
西沢正太郎

発行

昭和四十六年八月二十日 ©

発行者

久保田忠夫

発行所

株式会社ポプラ社

東京都新宿区須賀町五(二一六〇)

振替東京一四九二七一

印刷

新興印刷製本株式会社

製本

石毛製本株式会社

著者との話しあいにより検印は省略します。
落丁・乱丁本はいつでもおとりかえます。



はじめに

この物語に登場する少年少女たちは、見かけは悲しい運命にさらされ、不しあわせを背負っています。しかし、その苦しみや、なやみの底から、ほんとうの生命の火をもえ立たせようとしているのです。

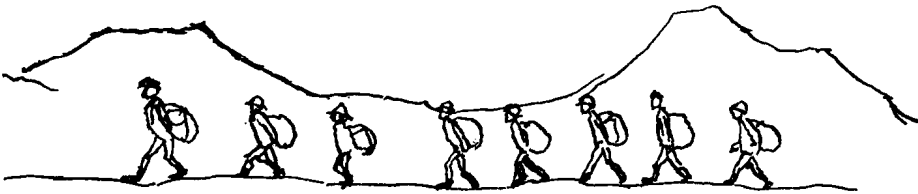
舞台は、武蔵野の西のはてにあるいなか町を中心に、学校と家庭をめぐり、ついに、はるかな雪線の峰までたずねていきます。そこに生きる野鳥や、けものたち、夏なお残る雪溪に、となり合って咲く高山植物の群落……。そのきびしくもすばらしい自然のおきての中で、少年少女たちのたましいはゆり動かされ、はっと、目ざめます。

さわがしい社会や、受験本位の日子におしつぶされることなく、もっと広い世界に、かっちり目を見はり、じぶんたちの力で波乱をのりこえていく機運がみなぎってきました。

さあ、夢多い少年少女時代の、真実あるべき姿を求めて、ロマンの扉を開くしましう。

もくじ

第一章	目をさせオオカミ少年	6
第二章	小さなわな	29
第三章	洞 ^{ほら} のmamシグサ	54
第四章	てんぐの巣 ^す	74
第五章	空木 ^{うつぎ} へのアプローチ	98



第六章 雲と植物の童話

123

第七章 火花ちる縦走路

149

第八章 天と地の門

175

第九章 笛

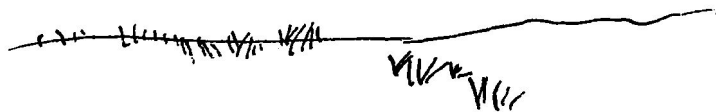
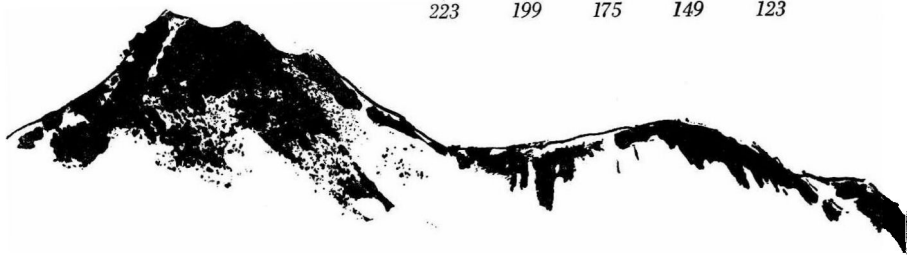
199

第十章 芽の支度

223

あとがき

244





そうてい・さしえ

鈴木 琢磨

山鳴りのアルプ

西沢正太郎

第一章 目をさませオオカミ少年

街のあらし

ジャジャーと、銀玉の小気味よい音が、目の下の受け皿になだれでできたとき、鳥山恵一は、背中に、みょうな空気を感じた。

「きみ、中学生とちがうか？」

いきなり見知らぬ四十男にぽんと肩をたたかれる。

恵一は、体をかわすひまもなかった。ここは、駅前通りでは、いちばんさかっているパチンコ屋「三楽」の中である。そのうなぎのねどこのように細長い店の奥にこもっていたので、もはやふくろのねずみも同然だった。

もうひとりの、目のぎょろっとした若い男は、すかさず恵一の右手をつかんで念をおした。

「ちょっと、そこまででてくれんか。すぐに話はすむんだから。」

若い男の声は、やさしかったが、手はきびしかった。

恵一は、思わず、

「う、うっ、ガオッ。」

とうなつて、はげしくからだをゆすり、相手の手首にかみつこうとした。

「こいつ。抵抗するか。」

若い男の目がけわしく光る。

「う、う、うっ……」

恵一は、しゃがみこんで、いつものここでも動かないかまえになったが、四十男のでっぷりした力に加勢されると、ひとたまりもない。

むりやり、恵一を乗せた若い男のオートバイは、うしろに四十男の護衛つきで、町をとばした。中央通りを過ぎて三分もやりすごすと、つきあたりに、名郷署の変哲もない石門が見えてきた。やがて、二台のオートバイは、その門をくぐり、奥まった建物の前で、びたっとエンジンを止めた。

恵一は、もう抵抗しない。背をこごめてうす暗い部屋の中におしこめられた。

この部屋には、天井に近いところに窓があるだけで、まわりの壁にはポスター一枚、カレンダーさえもはってない。

「そのいすにすわりな。」

恵一は、そういわれても、板の間にひざをかかえて顔をふせ、口をつぐんだままだった。

わなにかかったけものたちの感じる恐怖が、ようやく恵一の背すじを交流しはじめていた。若い男をはさみ、先刻の四十男もまじって、数人の声が部屋の入り口近くに集まってくる。

「きょうは、しけてましたなあ。」

「いずこも同じさ。」

「そろそろ花見も、終わりだし、おれのところだって、雑魚一匹もあみにかからんで。」

「めでたくもあり、めでたくもなし、か。ははっ。」

いっときの笑いがおさまったとき、

「いや、わたしのところは、たわけたねずみ一匹しとめてきました。何も抵抗しなけりや、その場で放してやってよかったんですけどね。」

四十男が、鼻のあなをふくらませ、ふふんと、部屋の奥を示して、つづけた。

「どうやら中学生らしいですね。」

「えっ、中学生ですか？」

そのとき、えんじ色のスポーツシャツを着た男が、うしろの方から、あわてて顔をだした。

「こりや、喜多先生どうも。」

恵一をとらえてきた若い男、つまり、この名郷署の小林巡査は、すこし気の毒そうになじみの先生を迎える。

「あの子ですね。」

喜多先生と連れだつて中にはいった小林巡査は、軽くあごをしゃくつた。

「おつ、鳥山じやねえかよ。」

喜多先生は、一瞬暗がりにとまどつてから、部屋のすみの黒いかたまりに近づいていった。

「先生、この子をよくごぞんじで。いやあ、駅前の三楽で、景気よくパチンコやってましてね、ちょっとばかり抵抗しましたから、連れてきたんです。」

「そうですか。じつは、この子は、こんど、わたしの担任したクラスにいる子ですよ。」

喜多先生は、そのあと、あやうく「評判のオオカミ少年でして」とつけ加えようとして、はつとふみとどまつた。

（鳥山恵一を、オオカミ少年にしてはいけないんだ。まして、この警察署に、札つきの少年としてリストにあげられては、もうおしまいかもしれない。）

昨年から引きつづいて、S県警察本部の委嘱で、少年非行防止協助力をつとめている喜多先生は、少年課の小林巡査とは、もちろん、よく知り合っている。

「しょうのないやつだな、鳥山。」

喜多先生は、うずくまつたままの鳥山恵一の肩のあたりを、なんどもさするようにしてこぼした。

「こりゃ、先生のクラスの子とは知らずに。もう、あとは、お任せしてもいいですよ。」

小林巡査は、先刻からの意気ごみに、さっぱり見切りをつけて、すべてを喜多先生にバトンタッチするつもりだった。

「ぜひ、そう願います。なにしろ、この子は、何年も口をきかない子でして。」

「えっ、どうりで、ぼっちり涙はだしても、なき声ひとつたてなかったわけがわかりましたよ。なおさら、先生でなくては、手に負えません。」

喜多先生と、小林巡査は、話し終わって、まだ部屋の外に集まっている人たちの仲間にはいった。

「それでは、みなさん、たいへんご苦労さまでした。軽食ですが、それぞれ食券をいただいて夕食をすませたうえで、きょうのところは、お引きとりいただきたいと思います。」

少年課長からのあいさつがあると、

「どうも、ご苦労さま。」

てんでに声をかわして、協助力たちは散っていく。

この少年非行防止協助力というのは、市内地区ごとに、商店、農家、大口工場、学校などから選ばれて、それぞれ委嘱状を受け、警察からの身分証明書を持っている。

市内小、中学校からもひとりずつということで中学校部からは、喜多先生がでていた。

協助力たちは、ふだん、さかり場や人ごみの駅、デパートなどを、おりにふれて注意して見回るほか、ときどき警察署員といっしょに街頭補導に向くのである。

たいてい夕方から、夜の十時ごろまでが多かったが、きょうはめずらしく土曜日の午後があてられたわけだ。

喜多先生と、小学校の先生、署からひとりと、三人のチームがわりあてられた地区は、映画館前から、市営グラウンド周辺までだった。

映画館前には、名郷中学校の問題少年たちが、四―五人たむろし、大げさに指をさしながら、嬌声を発していた。しかし、目ざとく喜多先生の姿をみとめると、わざと、「わかった、わかったよう」の身ぶり、尻を左右にふって、影のように消えていく。

少年たちの立ち去ったあとには、裸の女たちの原色の絵が、大写しになって、みょうにわびしく残されている。館内も閑散としていようすだった。

喜多先生たちは、むっとした気分で、その前を通りすぎた。

四月もなかばになると市営グラウンドのソメイヨシノは、あらかた散りつくして、あわたたしくみどりの芽と交替を始めている。さかりをすぎては、サクラの花の下に集まる人も、まばらであった。

結局、協助力たちのあてこんでいるめばしいものは、何ひとつあみにかからなかった。しばらく三人は、オートバイやスクーターを乗りすてて、グラウンドのベンチで、タバコをふかしていた。

と、すぐ西に連なる多峯主山の花のトンネル、山ザクラの白い列が、かっちりと喜多先生の目にとびこんできた。

名郷署^{なごうしよ}にもどり、協助力^{きやくしりょく}たちの立ち去った
いま、喜多先生は、はたと、その花のトンネ
ルに思いあつた。

「鳥山の家は、たしか多峯主^{たほうのす}の入り口だった
な。さて、いつかいつしよに山の花見にで
もいくか。」

喜多先生は、そういつて、鳥山恵一の手を
とろうとした。

軽くふりきる抵抗^{ていこう}はあつたが、二度めに
は、すなおに応^{おう}じる。

西の空の夕焼けも、とうに失^うせて、戸外^{こが}
は、すっかり暮^くれていた。

やがて、うしろの荷台^{にだい}に乗った鳥山恵一を
たしかめ、喜多先生のスクーターは、ゆっく
りと始動^{しどう}する。



おしまねの謎

鳥山恵一は、奇妙な少年であった。

中学生になつてから、一年、二年の担任の先生は、もう、どうにも手のつけられない少年として投げだしてきた。

実際、おしのようにことばを使うことを知らない中学生では、問題になりはしない。

名郷中学にも、知恵のおくれた子や、手足に障害のある子を指導する特殊学級はあったが、鳥山恵一の場合は、その対象外とされた。

しいてとなれば、特別の施設に入れるよりほかはない。それにしても、さして欠席もない少年を、いつまでも原級とめおきにしておいてよいものか。もっとも、学校にはよくくるといっただけで、教室にいることはめつたになかったが――。とにかく、学校としても、めいわくになるので、ことなく進級させ、早く卒業させてしまふはらがまえであった。

こうして、いよいよ、中学生最後の三年生を迎えたとき、喜多先生の担任ときまつたのである。

「やれやれ、ご苦労さまですっ。」

「喜多先生なら、おやりになれるわ。」

「あんがい、突然変異が起るかもしれないぞ。」

同僚の先生たちは、鳥山恵一のクラスを引きあてた喜多先生のくじ運のわるさに同情しながらも、いかにもほっとしたような表情で、お世辞まじりの軽口をたたいていた。

「いやあ、まいったね。しかし、あいつ、どうして口をつぐんでるんかねえ？」

喜多先生は、ひとりごとのようにいって、あらためて、重い荷を背負う覚悟をきめた。その日から、鳥山恵一のことを頭にこびりついてはなれなかった。そのやさき、わずかいっときでも、とにかく警察のやっかいになってしまったわけである。

ところで、喜多先生は、校長にも、かんたんにパチンコ屋にいた鳥山恵一のことを報告し、あとのことは、しばらく任せてほしいと申しでた。

「ひとつ、オオカミくんを頼みますわ。」

校長のほうも、ただべこつと頭をさげてくるしまつだった。鳥山恵一にきせられた「オオカミ少年」のあだ名は、とうに校長の耳にもとまっていた。それでいて、これまで手をこまねいていたようである。

喜多先生は、もう自力で、解決のいとぐちをつかまねばならないと思った。

個人の生活や学習を記録した指導要録を見ると、一年のときも、二年のときも、いちように、「ひとことも口をきかない。かげに回って、とび歩き、ほとんど教室に落ちついていない。動物的なところがあり、氣にくわないことがあると、ときに凶暴性を発揮する……」